井上ひさし　「藪原検校」『風景はなみだにゆすれ』　より

小学生時代、ある事情があって、東北の、山形、岩手、宮城、青森の各県を転々としたが、私の転出先には、どういうわけか必ず、小さいが深い、暗緑色の腐ったような水を湛えた沼や池があって、それらの陰気な沼や池は、これまたどういうわけか、必ずそれぞれ「座頭池」「琵琶ケ淵」「盲沼」「キンギョ池」など、盲人と因縁の深そうな名で呼ばれていたので、子ども心にも、不思議だなと思った記憶がある……これらの沼や池の名の由来を聞くと「昔、座頭や琵琶法師が誤って転落し、溺死したからだよ」というのが、いずれにも共通した、それぞれの土地の人たちの答だったが、今度、藪原検校について書くために、いろいろの資料に当ってみると、盲人たちは誤って沼や池に転落したのではなく、どうやら目明きたちの手で、沼や池に突き落とされ、溺死を強いられた、というのが事実らしいのである。

2017年、Yukawa-Nakayasuは秋吉台国際芸術村の主催するレジデンスプログラムにおいて、日本人アーティストの海外派遣枠に選抜され、9月1日〜10月25日の55日間に渡ってキョンギ・クリエーション・センター（韓国）で滞在制作をおこなうとともに、その成果発表として展覧会「Deep Breath」（Gyeonggi Creation Center / 韓国）を開催した。

「Deep Breath」は『三綱行實圖』（さんこうぎょうじつず）を起点に構造されている。『三綱行実図』とは儒教の基本の教えである「孝」「忠」「貞」の「三綱」を教育するための教本で、中国や朝鮮の歴史書に出てくる儒教の教えを忠実に守った人物の模範的なエピソードに絵図を添えて編纂されたもの。以前より口承文芸（口伝えで伝承される文芸）に興味を向けていたYukawa-Nakayasuは、韓国滞在時にこの『三綱行實圖』と出会い、「Deep Breath」へと組み込んでいく。ただ、その読み込みは物語の内容に寄ったものではなく、あくまでも描かれた絵図からのイメージを起点にしたもので、「Deep Breath」は韓国で拾遺した物品やパンソリ（韓国の口承文芸のひとつで19世紀に流行した伝統的民俗芸能）などを組み合わせて構成された。また後にこの「Deep Breath」は、作品追加などによる若干のリファインを加えながら「Deep Breath」（Lobby gallery, 韓国 / 2018）、「海外派遣成果発表展」（秋吉台国際芸術村, 山口 / 2018）として巡回している。

本展「reconstructing the “Deep Breath” 深呼吸の再構築」は、上記の「Deep Breath」の展開に位置付けられている。しかし、これまでと大きく異なるのは、一連の「Deep Breath」において制作された彫刻作品を、一旦文脈や背景から切り離した素材レベルへと思考をプリセットした上で、これまでに各地で拾遺していたモノコトなどと組み合わせた、再彫刻・再構成・再構築している点にある。そして、「今」を「これまで」から切り離し、「ここ」に合わせて再び「価値付ける」この行為に、Yukawa-Nakayasuは「市場」のイメージを重ねている。あるいはひょっこり立ち寄ったフリーマーケットなどで、多くの人にとって無用の長物であるかもしれない木材やネジ、飾りや布切れを目にした時、「あ、あれに使えるかもしれない」などと本来つくられた理由や用とは異なる「価値」を見出すこと。もしくは普段では考えつかないような転用のアイデアを思いつき、今まで無価値だったものが一転して重要なアイテムになること。

以上はいささか卑近な例ではあるが、本展の展示は、そういった「目」の在りように可能な限り近づくことができるかへの試行であるといえ、再彫刻・再構成・再構築したものが、オブジェクトとして、またはそれぞれの関係性などにより、新たにどのような文脈やも歴史を語り出すのか・見出されるのかをリサーチする試みであるといえます。

Gallery PARC

2017年、デンマークと日本の交流年ということで、京都芸術センターでもデンマークのアーティストによる展覧会を開催し、また、日本のアーティストによる展覧会をコペンハーゲンで開催するという機会があった。京都芸術センターからYukawa-Nakayasuも含めて何組かアーティストを推薦していて、数日間、Yukawa-Nakayasuのうち湯川洋康さんとコペンハーゲンでご一緒することになった。湯川さんは滞在制作のため先に現地入りしていたので、私が到着した頃にはすっかり土地に馴染み、街中を自転車で移動し、現地でいろいろなものを集めて作品を制作していた。

Nikoraj Kunshalでの展示『Falls From the Skies』は、会場となった元教会の遺物を用いながら、現地で集めたもの、またこれまでのプロジェクトから継続的に使用しているものを配置することで、それぞれのオブジェクトが互いに新たな関係性の中で相関し合い、鑑賞者それぞれに新しい物語が立ち上がることを誘発するような展示で、現地の人々からも好評をもって迎えられたのだが、コペンハーゲンでのできごとで印象に残っているのは展示だけではなく、一緒に行った蚤の市のことである。

毎日曜日に開かれるという蚤の市は、食器、古着、壊れた時計や色あせた家具、売れ残ったガラクタまでが渾然一体としていた。湯川さんはリサイクルショップや蚤の市で作品に使うものを選んでいたそうで、私も小一時間ほどそれぞれのお店を冷やかしたのだが、特に何も買わなかったと記憶している。一方の湯川さんはというと、手にたくさんの買い物袋を下げていたので驚いた。作品に使うつもりのものも、お土産や生活に使うものもあったようだったが、湯川さんの作品への向き合い方がごくごく自然に、日常や生活に連なっているところにYukawa-Nakayasuの制作への視座を見た気がした。

このことを思い出したのは、本展が、韓国にアーティスト・イン・レジデンスで滞在した際の展示を再構成したもの、と聞いたからだ。Yukawa-Nakayasuはこれまでも、日本各地でその土地の習俗や慣習、あるいは個人史と出会い、それらを分解・解体・再構成して別の物語の可能性を提示することで、彼らの言うところの「豊穣史」を紡ぎ出してきた。アーティスト・イン・レジデンスという制作と生活が地続きである滞在型のプログラムは彼らにとって有効なフォーマットであると思う。

彼らがテーマに掲げる「豊かさの歴史＝豊穣史」を考えるときに、Yukawa-Nakayasuの作品において、過去の作品で使われた素材が別の作品にも使われたり、別の意味を与えられて配置され直したり、といった連続性が見られることは大きな意味を持つように思う。「歴史」とは連続性の上にしか成立しないからだ。韓国での滞在経験と考察も、決してそれだけで簡潔することはなく、彼らのこれまでのリサーチとアーカイブスの蓄積の中に取り込まれることでまた新たな関係性へと接続され得る。たゆみなく「いま・ここ」で物事が更新されていくこと。その連続性こそが「豊穣史」に他ならない。

勝冶真美
（京都芸術センター プログラムディレクター）

reconstructing the “Deep Breath” 深呼吸の再構築

人間の社会はいつも、外部から来る「異なるもの」（異変・異物・異人など）を頭ごなしに拒否はしない。

日常は揺らぎ、違和感や戸惑いや不都合が空間を漂う中で、しかし社会はまずはそれを一度受け入れる。

そして解釈と理解を試み、落ち着きを取り戻そうとする。

それは大きな深呼吸のようであり、そうして社会はまた自然と平衡に向かっていく。

書物や口承文芸に刻まれた歌や伝説、教訓などの昔話には、そうした社会の「呼吸のリアリティ」が内在している。それは社会的な「異」との接触から、落ち着きを取り戻そうとした社会のあり様の、遠い過去からの伝達である。

私たちもまたそうした深呼吸のように彫刻をつくる。昔話に登場するモチーフやオブジェや背景などの要素を収集し、息を吸いこむように取り込んでいく。そして、それらをコラージュやパフォーマンスによる追体験などにより、身体的に同調していくプロセスを経て彫刻をカタチづくる。そこには昔話よりもさらに抽象的な存在として現在の社会に介入し、不特定多数に広がっていく、いわば歌い・語り・書き記すというもっともプリミティブな「伝達」そのものとしての彫刻が立ち上がってくる。

本作は、私たちの一貫したテーマ「豊饒史の構築」のための一つに位置づけられる。「豊饒史」とは端的に言うと「豊かさとは何か」を問う独自の概念である。やがて失われる過去のために、来るべき未来のために、私たちが打ち立てる「彫刻」という考察である。この考察は社会の呼吸のプロセスの中にこそ豊饒なるものが潜んでいるのではないか、そしてそのプロセスを伝達するプリミティブな行為にこそ人間社会の本質が内在しているのではないか、という問いに対するものである。

以上は二〇一七年に日本・韓国での巡回展としておこなった展覧会「深呼吸」のステイトメントである。

本展ではこの「深呼吸」で発表した作品に新たな視点から手を加え、その再構成・再構築をおこなうものである。これは、いわば彫刻としての捉え直しの行為であり、過去に拾い集め、彫刻化した際に用いたオブジェクトを、新たな視点でもう一度眺め直すものである。この新たな視点とは、オブジェクトが移動していく舞台としての「市場」や「交換」という場のイメージであり、集められたオブジェクトとそれによって構成される彫刻を、その舞台のもとでふたたび「彫刻し直す」ことへの試みである。

オブジェクトがやりとりされ、移動するその舞台は、異なる思惑、異なる価値観の人と人、異なるシステムの社会と社会が折衝し合い、平衡を取ろうとする社会的な場に他ならない。

本展では、過去に拾い集め、彫刻化した際に用いたオブジェクトを、その舞台の上でもう一度眺め直すものである。これは歴史的文脈に基づいて収集されたオブジェクトに、それを手に取ったときの姿・形・色・香り、そして「馴染みのよさ」といった価値、あるいはそれらを造形の一部に使用するときの機能性や実用性を無意識に感じていたことに、今ここで立ち返る行為ともいえる。本展では、自らが収集したオブジェクトに宿る「市場」の要素に意識的になろうとしている。そして、その自覚のもとで再構築された彫刻は、たとえば実用的な〝らしい物〟として作品の二重化をもたらすのではないだろうか。

一度作品化した既存の彫刻に対して手を加え、コラージュし、再構築することによって、その価値や評価は転換しうる存在になる。その転換は決して制作者本人の意向の下で行われない。そうしたことは、「市場」における〝需要の発生と消失〟（流行による大量生産、在庫の発生など）や〝実用性の発生〟（商人の目利きなど）、そして〝いま私たちが手に取るに至る理由〟といったことと関連づいてくるのかもしれない。

社会的「深呼吸」という概念とコンセプトは、再構築された彫刻を通していったいどのようなことを顕在化させるのか。これは「豊穣史の構築」のためにアプローチしてきた「物質ー精神の平衡」について、より物質の視点に立脚した考察である。

Yukawa-Nakayasu

Yukawa-Nakayasu
reconstructing the “Deep Breath”
深呼吸の再構築
2018.5.25 fri.＿6.10 sun.　11:00＿19:00　closed on Mon. / until 20:00 on Fri.
Gallery PARC

オブジェクトリスト　2018年5月29日現在

2階

01 – 大阪市東淀川区の八木庭園から借用した在庫の軽石／韓国プレヒストリーミュージアムの狼の写真
02 – 近所（大阪市西成区）で拾ったガラスケース（鋲打ち）／『三綱行実図』のプリント／太陽の写真／ノッティンガム（イギリス）の蚤の市で購入したペンシル／雑誌の切り抜き（表：月、裏：大陸の図）
03 – 四天王寺の骨董市で拾った鉄の灰皿（アクリルペイント、鋲打ち）／写真：松明
04 – 太陽の写真（額装、焼加工）／大阪玉造の服のリメイク屋 uptide から譲り受けた、リペア後の残布とプラスチックバッグ（焼加工、アクリルペイント、金彩）／ソウルで購入した電球
05 – 近所で拾った机の天板／コーナンで購入したパイプ／『三綱行実図』をプリントした生地（金彩、焼加工）
06 – 山焼きの写真（額装、焼加工）／uptide から譲り受けた服のリペア後の残布とプラスチックバッグ（焼加工、アクリルペイント、金彩）／ソウルで購入した電球
07 – 家にあった木箱（焼加工）／山焼きの動画
08 – 韓国キョンギクリエーションセンターで拾った額（焼加工）／無名の作家が描いた油絵（焼加工、アクリルペイント）
09 – 家の廃材（焼加工）／コーナンで購入したパイプ／コペンハーゲンの蚤の市で購入した「外国人の喧嘩の風景」の写真／木の箱（焼加工、鋲打ち）／鉄皿（写真は韓国の2枚のデモ）
10 – 棚のドア（焼加工、鋲打）／フィレンツェの蚤の市で購入した額と古紙（『三綱行実図』のプリント）／四天王寺で購入した木の枡（焼加工、鋲打ち、アクリルペイント）／竹（焼加工）
11 – 木箱（焼加工）／ピノキオの動画
12 – 韓国キョンギクリエーションセンターにて拾った木板（焼加工、アクリルペイント、『三綱行実図』に金箔）
13 – 秋吉台国際芸術村の廃木、タオルとプラスチックバッグ（焼加工、アクリルペイント、『三綱行実図』に金箔）

3階

01 – 八木庭園から借用した在庫の植木／姫路の蚤の市で購入したオイルランプ／uptide から譲り受けた生地／コーナンで購入した3×6合板の箱（焼加工）／太陽を撮影した映像／コペンハーゲンの蚤の市で拾った金の盆

4階

01 – 友人から譲り受けた木箱（アクリルペイント：〝国周『降御影街賑』- ええじゃないかの図〟）／ノッティンガムの蚤の市で購入したコインケース／シュガートングと砂糖とユーロコイン／グラスにドル札／ノッティンガムの蚤の市で購入したナイフとアメリカコイン／コペンハーゲンで拾ったまな板（アクリルペイント、焼加工）／ノッティンガムの蚤の市で購入したフックとカレンダー／フィレンツェの蚤の市で購入したフック／木の皿（プリント：松明）、日本のインターネットで購入したインドネシア製デンマーククッキーの缶（アクリルペイント）／ノッティンガムの蚤の市で購入した南京錠／着れなくなったシャツの袖（マクドナルドのマドラー〝M〟文字付）／韓国のコイン（穴加工）／アメリカコイン（樹脂加工）／ノッティンガムの蚤の市で購入したナイフとフォーク／１００円のショップで購入したフォーク／「Kensitas Cigarettes」社のシルク製トレードカード／韓国コインと五円玉（鋲打）／コーナンで購入した3×6合板（焼加工、鋲打）
02 – 和紙（とっとパークで釣った魚の魚拓）／近所で拾った傘の柄／コペンハーゲン蚤の市で購入した金色の写真入（写真：海でのパフォーマンス）／コペンハーゲンで拾ったまな板とナイフと道具の柄（ペン画）／貝／姫路の蚤の市で購入した太鼓／コペンハーゲンで拾ったアイロンカップ／木製球体パズルマジックボール／貝／匂い袋／友人から譲り受けた魚網／バレンタインでもらった地球柄の菓子缶／コペンハーゲン蚤の市で購入した写真入（雑誌の切抜き：月）／コペンハーゲンの蚤の市で購入した調理器具（韓国プレヒストリーミュージアムの猿の剥製）／コペンハーゲン蚤の市で購入した石鹸置き（金継ぎ）／ニット工場の糸を使用した5色の玉／コペンハーゲンで拾ったガラスビン／鳥取の海岸で拾った石（アクリルペイント）／鳥取の海岸で拾った貝／コーナンで購入した3×6合板（焼加工、鋲打）
03 – 友人から譲り受けたシンバル／ノッティンガムの蚤の市で購入した工具の柄／写真：松明／錫の枝／フラミンゴの羽／一輪挿し／木（錫木製ビーズ、赤い羽根募金の羽付）／MARIAGE FRERES の缶の蓋／ノッティンガムの蚤の市で購入した鍵、指宿白水館のプラスチックバック（焼加工）／コペンハーゲン蚤の市で購入した皿／韓国安山市のぶどうの種／5円玉（風船葛の種子と米付）／聖天山の石（金ペイント）、四天王寺で拾った鉄皿、羽根のブローチ（フラミンゴ、ダチョウ、ホロホロ鳥、サギ）／姫路の蚤の市で買ったオイルランプ、コペンハーゲン蚤の市で購入した木の器と友人から贈られたサボテン／ノッティンガムの蚤の市で購入した道具の柄（米、フラミンゴの羽根、ポプリ付）／四天王寺の骨董市で購入した仏像（金彩色、鋲付）、友人から譲り受けた化石、種子（ドライフラワー加工）／コーナンで購入した3×6合板（焼加工、鋲打）
04 – 家の近所に落ちていた木箱（写真：韓国 Jungang にあるラブロック横の落書）、イヤリングとピアス（ポプリとビーズ付）／コペンハーゲンで拾った陶器製の蓋とカップ／コペンハーゲンで拾った額（写真：ザグレブのカップル）／ヘビ革／針と糸と鈴／フィレンツェの蚤の市で購入したフック／ベローナのカステルヴェッキオで拾ったラブロック／指輪ケースと中之条で購入したジュースの缶の蓋と砂糖／砂糖とネックレスパーツ／ボローニャのバス停で拾ったバングル／食べたみかんの皮にアクセサリパーツ／コーナンで購入した3×6合板（焼加工、鋲打）
05 – 八木庭園から借用した枕木／聖天山の石（金ペイント）／コペンハーゲンの蚤の市で拾った金の盆／コペンハーゲンの蚤の市で購入した木製スコップとタイル／パリで購入したチョーカー
06 – uptide から譲り受けた生地／八木庭園から借用した軽石／ノッティンガムで作った過去作品
07 – 八木庭園から借用した植木／ uptide から譲り受けた生地／四天王寺の骨董市で購入した金具に種子と米と紅白の糸

Yukawa-Nakayasu

習慣・歴史・習俗をはじめとした過去から現在にわたる人間の営為とその痕跡と向き合い、そのメディウムやコンテクストを通じて多様な関係性を彫刻化する作品を制作。そして、彫刻化した作品を対象の〝平衡〟状態と見なし、その〝平衡〟を空間に配置する。鑑賞者が私たちの示す〝平衡〟と対峙するプロセスを通して現代社会に介入し、多様な次元を持つ関係性を構築する。

略歴

二〇一三　「湯川洋康＋中安恵一」として大阪を拠点に活動
二〇一八　「Yukawa-Nakayasu」のソロプロジェクトとして活動

展示・プロジェクト

二〇一八　The 12th Arte Laguna Prize、ベネチア、イタリア
〃　海外派遣成果発表展 秋吉台国際芸術村、山口
〃　「Deep Breath」Lobby Gallery、韓国
二〇一七　「Deep Breath」Gyeonggi Creation Center、韓国
〃　「豊饒史のための考察」Nikolaj Kunsthal、コペンハーゲン
〃　「利益の石」金沢アートグミ、金沢
二〇一六　「豊饒史のための考察ー二〇一六」Gallery PARC、京都
〃　「流暢な習慣」江之子島文化芸術創造センター、大阪
二〇一五　「羽根を休めるハビトゥス」中之条ビエンナーレ二〇一五、群馬
〃　「漂い、刻まれ、漂う偶然」Galeria大正蔵、淀江（鳥取藝住祭二〇一五）
〃　「豊饒史のための考察」第十八回岡本太郎現代芸術賞展、川崎市岡本太郎美術館、神奈川
二〇一四　「港は船に運ばれて 船は港に寄せられる―便りは届く―」Kapo gallery、金沢
〃　縣神社美術館プロジェクト、縣神社、宇治

レジデンシー

二〇一七　Gyeonggi Creation Center、韓国
〃　SVFK、Copenhagen、デンマーク
二〇一四　CAAK & Kapo Creator in Residence、金沢

受賞・助成

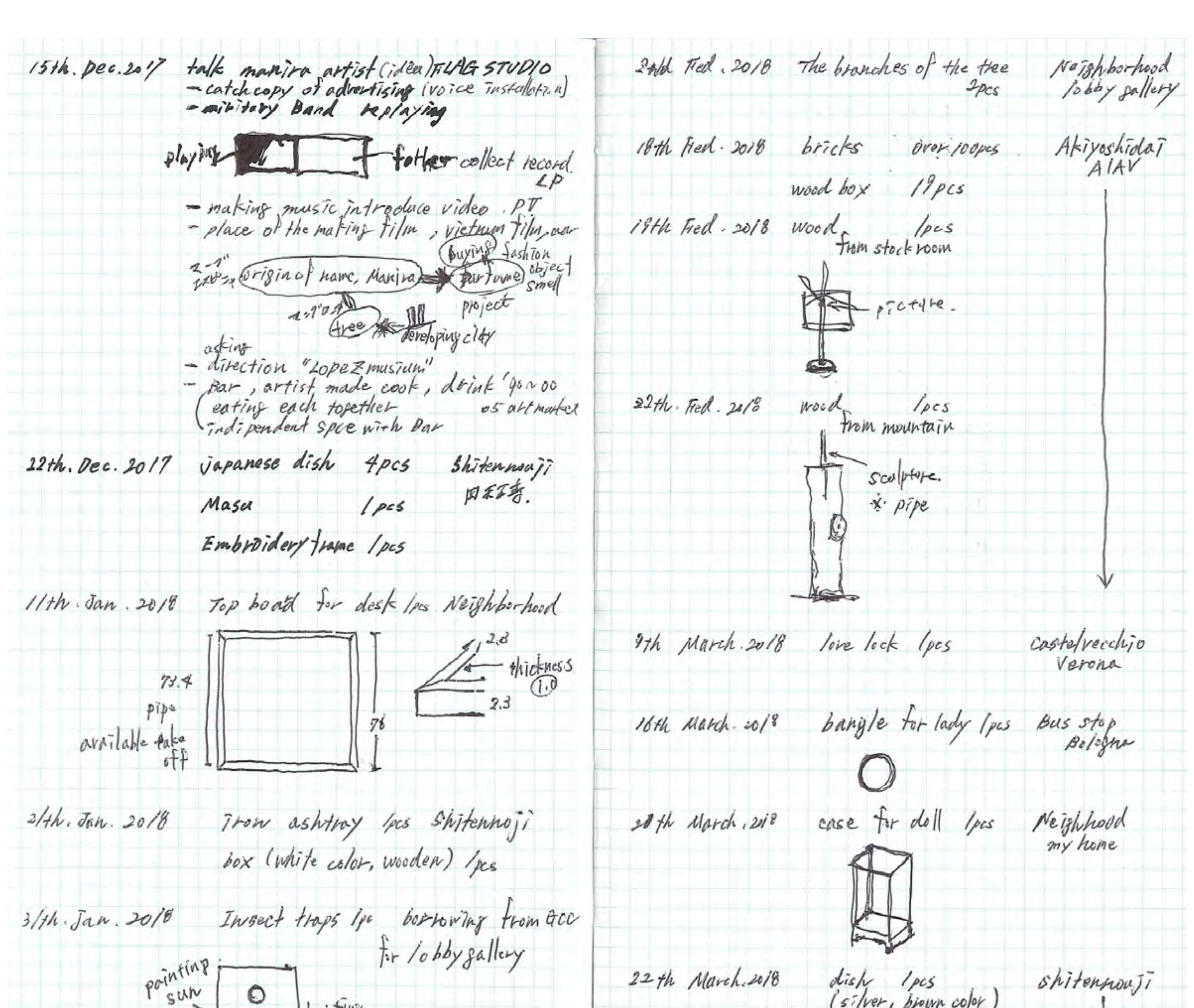
二〇一八　The 12th Arte Laguna Prize 大賞、ベネチア、イタリア
二〇一七　秋吉台国際芸術村 trans_2017-2018 日本人アーティスト海外派遣枠
〃　スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団助成
〃　岩井コスモ証券ASK支援寄金、Arts support Kansai
二〇一六　GalleryPARC Art Competiton 2016、Gallery PARC
二〇一五　Artist Support Program enoco[study?]#3、江之子島文化芸術創造センター、大阪
〃　第十八回岡本太郎現代芸術賞　入選、川崎市岡本太郎美術館、神奈川

出版

二〇一四　出版社「流通文社」設立
二〇一六　『記録集 二〇一四ー二〇一六』
二〇一四　『港は船に運ばれて 船は港に寄せられる　金沢』
〃　『依』1号
〃　『理念字』

パブリックコレクション

縣神社（宇治市）



近代的商人はあらゆる物質と貨幣を資産として記録に取る

Yukawa-Nakayasu

yukawa nakayasu confront aspects of human agency and its traces that span from the past until present from habits, history, to customs, as a means to create works that sculpturize diverse relationships through appropriation of their medium and context. The sculptural works are considered as a “balanced” condition of their subject, and thus this notion of “balance” is arranged and positioned within space. The works enable viewers to intervene with contemporary society through the process of confronting “balance” as proposed, thereby constructing relationships that embody a multitude of dimensions.

http://yukawanakayasu.net

ふと、Yukawa-Nakayasuの身体性について考えることがある（最初に断っておくと、彼 / 彼らが「1人の / 人間」か「複数の / 人間」かどうかはあまり問題ではない。ただし、便宜上ここでは「彼」と呼ぶことにする）。

今回提出されているオブジェクトリストから、どこかの道端で拾った何か、誰かの家から借りてきた何か、蚤の市でふと見つけた何か…など様々な時間と場所が見てとれる。そこには彼の手の痕跡、それを手に取り、触れたという生々しさを感じるのだが、彼はそれら過去から現在までの時間軸に存在していたモノをそれまでの文脈や背景から切り離し、再構築して「いま・ここ」に定着させ、彫刻作品をつくる。

その時、彼は自分が経験してきた時間や場所、あるいはモノの手触りにまつわる知覚を編集しているのではないか。それは同時に自身の習慣、あるいはモノにまつわる歴史や習俗（別の誰かの習慣も染みついているかもしれない）の組み替え作業でもある。その時、Yukawa-Nakayasuの身体がぐっと立ち上がってくるように私には思えるのである。

その身体は、フランスの現象学者モーリス・メルロ＝ポンティ（1908-1961）が『知覚の現象学』で示した身体、あるいは「身体図式」を想起させる。メルロ＝ポンティは身体を物体として捉えるのではなく、知覚の主体、世界における存在の基盤として捉える。「身体図式」はその身体の運動のあらゆる素地であり、常に世界と関わる身体のあり方そのものであり、知覚や経験を姿勢や動きに変換・翻訳していくものである。つまり、私たちは身体によってモノと交流し、その運動の中でモノを知覚し、「身体図式」を組み替えながら、世界の中にモノを定立させたり、取り扱ったりするのである。

Yukawa-Nakayasuの作品にはそういった身体の様相と「身体図式」の組み替えの痕跡をみることができる（今回の展覧会のタイトルにある「深呼吸」という言葉からも、息を吸い吐きながら彼の身体図式を更新していく様を想像することができる）。

ただ、同じことの繰り返しになるが、そうは言ってもYukawa-Nakayasuとは具体的に誰であるのかということや実在そのものについては不明瞭で、Yukawa-Nakayasuは世界の奥底に沈殿した、「誰か」とも名指しできない匿名の身体のあり方を提示しているようにも思える。それはもしかしたら私の身体かもしれない、ということもなきにしもあらず、である。

高坂玲子
（大阪府立江之子島文化芸術創造センター チーフディレクター）